日英対照研究に向けた感情のメタファーの分類

大石　亨
明星大学　情報学部　情報学科
oishi@ei.meisei-u.ac.jp

1　はじめに

われわれは，日本語の概念メタファーを分析するためのデータベースを作成している(大石 2005)．本稿では，このデータベースから抽出した感情のメタファーを分類した結果を提示する．また，この結果をKövecsesによって行われた英語における広範な感情表現の研究(Kövecses 2000)と対照することにより，日英語間の相違を明らかにする．

二つの言語を比較すると，基盤とする認知様式の大枠は共通しているものの，その実現形式にはいくつかの違いが見られることがわかる．従来研究では，その違いの原因は主に歴史的な偶然とみなされ，個別の感情ごとに文化的な解釈が行われてきた．われわれは，これらの相違には一貫性があり，他の言語現象と共通する特徴がみられることを明らかにする．その特徴とは，<自己分裂>vs.<自己投入>，<結果重視>vs.<過程重視>という認知的な営みに対する傾向の違いである．

2　日本語の感情のメタファーの分類

本節では，日本語において感情を描写するときに用いられる比喩的な表現を分類した結果を述べる．ただし，見出しは便宜的に付けたものであり，これらのレベルの概念メタファーの実在性や重要性を主張するものではない．

2.1　心は体である

悲しみは心の痛みとして表現される．

(1)心が痛む，胸を痛める，心がうずく，心を傷つける，胸をえぐる，悲しみが心に突き刺さる，心が引き裂かれる，胸が張り裂ける，胸が締め付けられる，傷つく

また，「衝撃」「打撃」といったショックを表す表現 や，「重圧」など，プレッシャーを表す表現がある．

(2)不安に押しつぶされる，不安がのしかかる，重圧をはねかえす，重苦しい雰囲気

2.2　心は容器である

心を開閉する容器として捉える表現には次のようなものがある．

(3)心を開放する，心を開く，胸が塞がる，悲しみに閉ざされる，胸がつまる，心に忍び込む，胸にしまっておく，胸に宿る，心に巣食う

「胸がすく」というように，心は開放されて，つかえがないときに気分がよく，塞ぐとよくないもののようであるが，中身はつまっているほうがよいことが多い．

(4)心を満たす，自信がみなぎる，希望に満ちる，感動で胸がいっぱいになる，充実感

ただし，「憂いが満ちる」ともいい，中身にもよる．これらは，後述する感情を液体とみなす表現でもある．

また，「夢」「期待」「好奇心」などは，容器としての「胸」を膨らませる．

(5)期待に胸を膨らませる，夢が膨らむ，思いが膨らむ

2.3　感情は所有物である

これまで，感情の入れ物である「心」に関する表現を見てきたが，感情そのものはどのように概念化されているだろうか．感情の存在を述べるとき，しばしば用いられる動詞は「持つ」と「抱く」である．双方とも，正負にかかわらず，多様な感情と共起する．一方，「抱える」「背負う」などは，共起する名詞に対する制限が強い．

(6) {悩み，不安} を抱える
{期待，責任} を背負う
{哀愁，哀調，憂い，愁い} を帯びる
{怒り，恨み，顰蹙，反発} を買う

これらの動詞は，その意味の中に，苦痛や重圧，持ち重りすることや対価を払うことといったニュアンスが含まれているからであろう．

持っているものは，捨てたり取り戻したりすることもできる．

(7)執着を捨てる，疑念を払う，不安を取り除く，自信を取り戻す

また，感情は隠したり，のぞかせたりすることができる．

(8)苛立ちを隠す，欲望が潜む，意欲をのぞかせる，悩みがのぞく，平静を装う

これらは，心という容器を前提とした表現であるとも考えられる．

さらに，感情を減殺したり破損させたりする表現には，以下のようなものがある．

(9)不満を抑えつける，欲望を抑える，動揺をおさえる，感情を殺す，野望を砕く，意欲を削ぐ，思いを踏みにじる

「おさえる」や「殺す」は，後述する生物のメタファーであり，自分の感情を抑制する場合に用いられるのに対し，相手の感情をないがしろにする場合は，物扱いすることがわかる．また，「怒りに触れる」「しゃくにさわる」というように，接触してはまずい感情もある．

また，感情は食物と共起する動詞の項になることもある．

(10)喜びをかみしめる，感動を味わう，苦しみをなめる，愛情に飢える

これらは，経験を食べることで表す一般的なメタファーのサブメタファーであろう．

2.4 感情は移動物である

次に，感情が移動する表現を取り上げる．

(11)衝撃が走る，不安が心を横切る，不安が胸をよぎる，懸念が遠のく，心に迫る

一瞬の感情は走り去るのに対し，心配事は，「心にひっかかって離れない」場合もある．

移動表現と共起する特殊な感情として，「関心」「共感」「人望」などの語群がある．これらは，

(12)関心が集中する，期待が集まる，支持を集める，共感が寄せられる，同情を寄せる，関心を移す，情が移る，心が傾く

のように，人々の間を移動して離合集散する．これと関連して，「興味」や「注意」，「気」などが引き付けられる．

(13)関心を引き付ける．興味を引く，関心が向く，注意を向ける，関心を払う，注意を集中する，気をそらす，気が散る

2.5 感情は水である

感情が水をはじめとする液体にたとえられることは，（Nomura 1996; 大石 2006）などで指摘されてきた．(大石 2006)は，感情が，容器としての心の底から湧き上がり，溢れ出す水に喩えられる場合と，人体を取り巻く液体として捉えられる場合の，2種類の認知様式があることを指摘している．(14)は前者の，(15)は後者の例である．

(14)勇気がわく，不安がわき上がる，感慨がわき起こる，喜びがあふれる，自信にあふれる，怒りがこみあげる，憎悪が渦巻く，愛情を注ぐ，情熱を傾ける，不安を拭う

(15)愛におぼれる，悲しみに沈む，感傷に浸る，寂しさが身にしみる

沈み込む感情は，「悲しみ」「悲哀」「物思い」など，負の感情が多く，ここには後述する方向のメタファーが関わっていると思われる．

一方，相手の感情は，くみ上げることになる．

(16)不満をくみ上げる，気持ちをくむ，心情を汲みとる

2.6 感情は火である

火に喩えられる感情は，「怒り」「憎悪」などの激情(17)と，「情熱」「闘志」などの，いわゆる「熱い思い」(18)の二つに分けられる．

(17) 不満がくすぶる，反米感情をあおる,怒りに燃える,怒りが燃えたぎる，怒りが立ち昇る，怒りが収まる，怒りが鎮まる

(18) 闘志をかきたてる，情熱を燃やす，希望に燃える，正義感が燃え上がる，士気が衰える

また，「恋に身を焼く」「胸を焦がす」などの表現もある．さらに，激しい感情の放出は，爆発に喩えられる．

(19)感情を爆発させる，怒りが爆発する，感情が噴き出す，不満が噴出する

2.7 感情は熱である

前節の「熱い思い」もいつかは冷えてしまう．

(20)熱意が冷める，興奮がさめる，熱意が冷える，企業マインドを冷やす，冷静

これらは，「興奮は熱である」という概念メタファーを形成している．

一方，「恐怖に凍りつく」「悪寒が走る」などの表現にみられるように，恐怖は冷たさである．

2.8 感情は生物である

ある種の感情や精神は，あたかも人の子供ように，育てたり養ったりすることができる．

(21)情熱をはぐくむ，自立心を育てる，精神を養う，心が成長する

また，次のような表現もある．

(22)悲しみを誘う，反感を招く，思いがつきまとう，絶望に襲われる，悲しみにとらわれる，心をなぐさめる，気持ちが働く

いずれも擬人的な表現である．

人以外では，感情を植物に喩える表現がある．

(23)気持ちが熟す，心に根づく，恐怖感を植えつける，愛情が芽生える，

最近ネット上で使われる「萌え」「萎え」という表現も，もとは植物の状態である．

2.9 その他の物

これまでに挙げたもの以外に，特定の表現でのみ用いられる物として，布(24)，糸(25)，刃物(26)，雲(27)，建築物(28)などがある．

(24)悲しみに包まれる，心をなびかせる
(25)張り詰めていた気持ちがふっと緩む，緊張が緩む，気持ちがほぐれる，野望を絶つ，未練を断ち切る，望みをつなぐ
(26)怒りの矛先を向ける
(27)悲しみが覆う，心を曇らせる
(28)精神的に不安定になる，精神が崩壊する

(27)の「覆う」は(24)と同様，布の可能性もあるが，雲に覆われたときの気持ちを表していると考えたほうが，次のような表現との整合性がとれる．

(29)胸が晴れる，心が晴ればれする

このほかに，「動揺」や「迷い」を表す以下のような例が多数ある．

(30)心を揺さぶる，心が揺れ動く，動揺する，心が揺れる，ゆるぎない，物事に動じない，気が動転する

これらは，建築物というよりは，精神的安定を表す独立のメタファーと考えてよいだろう．

2.10 導管のメタファー

導管のメタファーとは，コミュニケーションを物の移動に見立てるメタファーである(Reddy 1979)．言語表現を容器に，その意味を内容物にたとえる場合が多いが，われわれは，言語表現に感情を入れることもできる．

(31)怒りが込められる，心を込める，思いがこもる，心情を託す，思いを乗せる

こうして届けられた思いは，相手に伝わる．

(32)思いが届く，気持ちが通じる，気持ちがつながる，熱意が伝わる，喜びを伝える

2.11 方向・動き・強弱など

(Lakoff and Johnson 1980)が挙げる上下のメタファーの中に，HAPPY IS UP; SAD IS DOWNがあるが，これに対応するように，日本語にも以下のような例がある．

(33)意気が上がる，気勢を上げる，気分が浮き浮きする，舞い上がる，意欲を起こす，落ち込む，落胆，絶望のどん底，悲しみに沈む

ただし，「気持ちが落ち着く」「冷静沈着」などの例は，(30)に挙げた地に足のついた精神的安定性を表すものであろう．

また，感情は力を持ち，人を動かすことがある．

(34)焦燥に駆られる，怒りが駆り立てる

さらに，心は踊ったり，はずんだりする．

(35)心を踊らせる，胸が踊る，血が騒ぐ，心が弾む，胸が震える

また，感情は強まったり，高まったり，薄れたりする．

(36)愛情が強まる，不安を強める，不満が高まる，やる気を高める，意欲が薄れる，淡い感情

「強さ」は力と，「高さ」や「薄さ」は熱や液体と関係があるかもしれない．

2.12 メトニミーによる表現

最後に，メトニミーによる感情描写について触れておく．これには，ある状況を述べることによって，そのときの感情を描写する表現(37)と，ある感情に襲われたときの身体の状態変化について述べるもの(38)とがある．

(37)追いつめられる，八方ふさがり，閉塞感，突破口を見出す，自分を見失う
(38)頭の中が真っ白になる．体の血が止まったような思い，身が引き締まる思い，目が点になる．目がハートになる．

ここにあげた例では，どちらも実際には起こっていない状況や状態変化を述べているので，メタファーも関与しているということができる．同様に，前節までに挙げた例の中にも，メトニミーから派生したと考えられるものが含まれている．

3 英語における感情のメタファー

本節では，Kövecsesによって行われた英語における広範な感情のメタファーの研究の概略を紹介する(Kövecses 2000)．Kövecsesは，代表的な感情としてAnger, Fear, Happinessなど７つの基本感情を取り上げ，それぞれの感情を表す言語表現を収集し，概念メタファーを洗い出している．さらに，Talmyの提唱したFORCE DYNAMICS (Talmy 1988) の枠組みを利用して，さまざまな概念メタファーは，EMOTION IS FORCEという一つのマスターメタファーのもとに統合できると主張している．

Kövecsesが研究対象としている７つの基本感情やデータ収集の方法は，われわれのものとは全く異なるが，彼が提示している概念メタファーの多くは，前節の分類と重なるものが多い．以下に，彼の抽出した概念メタファーの元領域とそれに対応する前節の例文番号を示す．

Container	(3)(4)(5)(31)
Internal pressure	(4)(5)(14)(19)
Physical damage	(1)
Opponent	(9)
Wild animal	(9)
Natural force	(15)
Fire/heat	(17)(18)(20)
Rapture/high	(33)
Hidden object	(8)
Living Organism	(21)(22)(23)
Nutrient/food	(10)
Hunger	(10)
Physical agitation	(30)(35)
Burden	(2)(6)
Physical force	(36)
Magnetic force	(12)(13)

紙面の都合で詳述できないが，多くの元領域が両言語に共通して用いられていることがわかるであろう．

4　メタファーの日英差をもたらす要因

前節では，多くの概念メタファーの元領域が，日英語に共通して用いられていることを指摘したが，言語が歴史的・文化的存在である以上，言語間に差があることは，むしろ当然ともいえる．従来研究でも，英語のangerは制御を失って報復に向かうのに対し，日本語の怒りは腹におさめて制御することが重視されるなどということが指摘されてきた(Matsuki 1995).

われわれは，このような個別の感情に対して文化的差異を指摘するだけではなく，感情のメタファー全体を見渡すことによって，より根源的な差異を明らかにすべきであると考える．

われわれの調査によって明らかになった，英語にはあって日本語にはない（あるいはまれな）元領域として，Divided self, Trickster, Social superiorが挙げられる．これらは，いずれも感情を別人格として取り上げ，それが理性的自己を騙したり支配したりするといった捉え方である．これらが日本語にみられないのは,<自己の他者化>を避けるという傾向を日本語が持つからである．このことは，無生物主語や再帰代名詞の有無など，さまざまな具体例とともに，池上が指摘している(池上 2006)．池上は，<自己分裂>と<自己投入>という用語を用いて以下のように説明する．

> <自己分裂>のほうは文字どおり<自己>を<視る主体>と<視られる客体>に分裂させ，その結果, <主客対立>の構図が演出されるのに対し, <自己投入>のほうはその種の分裂は伴わない．<自己>はそのまま<主体>としてあり続ける. <主体>としての機能は維持したまま，把握の対象とする事態の中に臨場することによって，いうならば<視る主体>と<視られる客体>の合一――<主客合体>の構図が演出されることになる．（池上 2006, 191-192）

この違いが，概念メタファーの元領域の選択にも影響を及ぼしていると考えるのである．

もう一つ，われわれが見出したのは，日本語の<過程重視>に対する英語の<結果重視>という特徴である．このことは，影山が移動表現や行為と状態変化の関係など，これも非常に多様な例文で示している(影山 2002).

(5)で示したように，日本語の「膨らむ」は，「夢」「期待」などが次から次へと増えていく過程を表すのに対し，英語の ‘puff up’, ‘swell’ という動詞は，いずれもプライドに対して用いられ，態度の大きさすなわち膨らんだ結果の状態を表す．また，英語では ‘explode’はangerなど負の激しい感情にのみ用いられ，周りに与えるダメージを含意するのに対し，日本語では「喜びが爆発する」「嬉しさを爆発させる」などの表現も可能である．これは日本語の「爆発」が発散の激しさのみを重視し，結果の悲惨さを含意しないからといえる．さらに，日本語の「身を焦がす」が恋する過程を表すのに対し，英語の ‘burned up’は「身がやつれる」という結果を表す．また，英語の ‘sweep off one’s feet’は場所の移動から「夢中にさせる」という意味に拡張するが，日本語の「足をさらう」は，倒れる動作に対応した意味を表す．他に，感情の原因を述べることで感情を表すメトニミー的な表現（原因から結果への写像）が英語には多数見られるのに対し，日本語ではまれである等，英語の結果重視，日本語の過程重視を支持する例は多数見られる．

5　おわりに

本稿では，これまで，個別的な文化の違いによってもたらされるとされ，恣意的な説明がなされてきたメタファーの言語間の相違が，一貫した特徴を持つことを指摘した．この特徴は，これまで他の言語現象に対して提唱されてきた，<自己分裂>vs.<自己投入>，<結果重視>vs.<過程重視>という事態把握に対する好みの差が生み出したものである．今後は，他の領域のメタファーに対しても同じことが言えるかを検証していく必要がある．

参考文献

池上嘉彦(2006). 『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会.

影山太郎(2002).『ケジメのない日本語』岩波書店.

Kövecses, Zoltán (2000). Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling, Cambridge University Press.

Lakoff, G. & M. Johnson . (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press. (渡部昇一,楠瀬淳三,下谷和幸訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店.)

Matsuki, Keiko (1995). Metaphors of anger in Japanese. J. Taylor and R.E. MacLaury(Eds.), *Language and the cognitive construal of the world*, Mouton de Gruyter. pp.137-151.

Nomura,Masuhiro(1996) The Ubiquity of the Fluid Metaphor in Japanese: A Case Study. *Poetica*, 46, 41-75.

大石亨(2005) 共起情報を用いた概念メタファーの発見. 言語処理学会第１１回年次大会, .392-395.

大石亨(2006) 「水のメタファー」再考 ―コーパスを用いた概念メタファー分析の試み―日本認知言語学会論文集. 第6巻. 277-287.

Reddy, Michael J.(1979). The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. Andrew Ortony, (ed.), Metaphor and thought. Cambridge University Press.

Talmy, Leonard. (1988). Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science*, 12, 49-100.